

雨宿りの夜、同僚の彼女は嘘を やめる

ギャル系の同僚が、初冬の雨宿りで距離を縮める——越えてはいけない距離が崩れる秘密の高揚

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

プロローグ：硝子越しの湿気

空気が重く、まるで誰かが天井を塞ぎ込んでいるような、初冬の深い昼下がりの雨。巨大なガラス窓が歪んで反射する街灯の明かりが、室内に冷たい銀色の帯を描いている。そこには二人。長年の波瀾万丈な仕事で磨かれた器量を持つ同僚であり、今や公私ともにすべてが一つに溶け合った男女。彼らは「彩香」と「翔」だ。

長いプロジェクトが幕を閉じた後の余韻。疲れ果てた体を引きずりながら、ふらりと訪れたこの静寂な空間。雨音だけが時を告げるような、何とも儚げな午後の時間。翔は濡れ落ちそうな上着を脱ぎ捨て、背筋を立てずに椅子に深く沈み込む。そして、その視線の先にあるのは、少しばかり色白に枯れ込んだ頬を持ち、三十歳という黄金期に差し掛かった彩香だった。

彼女もまた、同じように息を整え、膝の上で震えるような微細な動きを見せることなく、ただ静かに翔の方へと眼差しを向けている。二人の間には、言葉では計り知れない電流のようなものが張り巡らされている。それは単なる親

密さでも、単純な友情でもない。数年間の激しい共闘生活の中で積み重ねられた理解と、そしてそれを越えた、底知れない欲望の予感が空気を締めつけているのだ。

「どうやら、私の方が少しだけ冷やしていたようだね」

彩香の声は低く、かつ艶めかしい響きを持っていた。彼女は窓際の隅っこから身を乗り出し、翔の顔面に近づく。そこはまるで、熱帯の動物が温かい獲物を探すかのよう、に、慎重でありながら貪欲だった。

「ああ、君の方が熱いのか？」

翔は軽く苦笑いを浮かべながらも、彼女の触れる指先に唇を運ぶ。その指は涼しくても、届いた瞬間には驚くほどに熱を持っている。初冬の雨宿りのような設定だ。外は湿気で満たされ朽ちていく世界なのに対し、この小さな室内では、二人だけが作り出した閉鎖的な空間で、互いの体温が対になって火花を散らしている。

関係性は再会から始まったばかりというのに、すでにどこかで交錯しつつある。仕事上の機微が混ざり合い、言葉尻を踏むようにして繰り広げられる会話。それは官能小説の世界観においてよく見られる、背徳感に近い緊張感を生み出していた。周囲の視線がないわけではないが、彼らは世界を忘れていて。あるいは、この二人だけの法則によって、常識という枠組みさえも歪められているのだ。

翔の視界の中で彩香の色調が鮮やかに浮き上がる。彼女の髪型は少し乱れ気味で、首筋が露出して雨の冷たさを恐れるまいと、わずかに震えているようでも、瞳だけは澄んでいた。三十歳という年齢が持つ、二十代とは違う豊かさや、肉体的な成熟度を感じさせる曲線。肩のラインが美しく落ち込み、胸元が深く開けられそうな制服のような格好。彼女はあえて窮屈さを覚えたかのように、羽織っているものを緩めに着こなしており、その隙間からは温かい生命感が漏れ出ている。

「翔、見てるだけじゃないのか」

彩香は低く囁き、自分の胸元にある何かを指差す。そこには、雨粒一つ滴り落ちない程に整った、女性としての優美さが宿っていた。翔はその指先を捉え、ゆっくりとそっと引きずる。彩香は一瞬の溜息と共に、背筋を伸ばして椅子から立ち上がった。足元のタイルに響く、ふらつくような音。それは自信満々に見せている彼女だけが抱える、内側からの揺れ動く感情の証だった。

二人の間を流れる時間は、まるで粘稠な蜂蜜のようであった。進みも止まりもしない、このスローモーションの中で、言葉で表現しきれない感覚が膨張していく。それは触覚よりも先に、嗅覚へと働きかけてくる。濡れた髪から漂

う香り、あるいは汗じみになった肌から発する独特の塩気。初冬の冷たさの中に溶け込んでいる、生々しい熱意。

窓の外では、街並みがぼんやりと滲んで見え始めた。遠くのネオンサインが反射し、室内を幻想的な照明のように包み込んでいく。それを見るとかと思えば、実際は二人の顔面同士が密着し合い、呼吸がシンクロしているように感じる瞬間があった。そこには「結ばれる」という予感が渦巻いていた。長い歳月を経て出会った相手との結びつき。それは偶然ではなく、運命による必然的再会という名の奇跡だ。

翔は再び彼女の唇に触れた。その仕草は大胆でありながら、どこか繊細さを欠かない。彩香はそれを受けて、顎に手を当てて翔を見下ろす。彼女の色白な肌が、暖炉のような彼の体温によって紅潮していきそうな気配さえした。言葉は必要ないのか、それともこの静寂こそが最高の対話なのか。

「もう、動き出さないか」

彩香の声が掠れ、少し甘酸っぱい響きを持つ。彼女は再び翔の喉元に顔を埋め、息遣いが混じり合う。そのたびに、部屋の中の湿気がさらに高まり、二人を引き寄せ合う重力が増大していくような錯覚に陥る。これは単なる雨宿りの合間にある遊びでもなく、本格的な夜への導入部。最

も濃い夜の只中へと繋がる序章であり、行為そのものはまだ先のことだが、今まさにその予感だけが空気を締めつけているのだ。

翔は彩香の首筋を噛みしめるように触れ、彼女が微かに身を縮こませたのを確認する。三十歳の女性特有の、肉付きの良さと弾力が、指先に伝わる毎に新たな刺激となっている。彼らは互いの隙間に滲み込むほどに親密になり、まるで一つのアート作品のように溶け合い始めている。

「初冬……いい選択だ」

翔は独白のように呟く。そして再び彼女の瞳を見つめた。そこには鏡のような深淵があり、翔自身の内側の欲求まで映し出されている。この小さな空間で、雨音というノイズを排除して、二人だけで作り上げる世界観。それは官能小説において最も愛される、静寂の中に鼓動が高まる瞬間だった。

彩香が唇を開き、次の言葉を探しているように見えた。しかし、彼女はすぐにそれを飲み込み、自分の喉元にある何かを舐める仕草をする。背徳的な緊張感が、二人の呼吸のリズムに合図を送りながら、ゆっくりと高まり続けていく。雨粒が窓を伝い落ちていく音が、時折、二人心拍子のリズムに合わせて鳴ることもある。

物語の冒頭として、これ以上ない程に濃厚な余韻を残すことのできるプロローグ。二人の関係性が爆発する直前の、あの一瞬の静けさを捉えるために、言葉を選びつつも情感だけを膨らませていく。まだ何も始まっていないような、いつまでも続く午後。その先には、二人の身体が完全に重なり合う夜が待ち構えていることを、翔は既に予感していたのだ。



——ここから先は製品版でお楽しみください——